

例会500回記念シンポジウムへ古代文学研究の新世紀へ

生成する神話、越境する方法

——シンポジウム「歴史叙述と注釈」をめぐって——

斎藤 英喜

古代文学会の活動のなかで、神話研究プロバターの成果は少ない。『記』『紀』という国家神話・王権神話、文字化された神話にたいして、村落共同体における「生きている神話」の探求である。発生論、様式論という方法によって結実した諸成果は、沖繩・南島古謡を「資料」とした具体的な表現分析や、文化人類学の方法に学んだ村落共同体の幻想構造、または祭祀と神話、昔話と神話の関係などを踏まえることで、それまでのイデオロギー的な氏族伝承論や民俗学的発想をこえる、豊かな神話の表現分析へと踏み込むことを可能とした。たとえば「神話」「叙事」という視点は、神話プロバターに限定されることなく、歌（万葉歌）の研究領域にも跳ね返ってくるような、古代文学研究のあらたな可能性を切り開いたものといえよう。

さて、今回のシンポジウムが設定した「歴史叙述と注釈」というテーマは、そうした研究成果の「次」の課題を提示しようとしたものである。神話研究における発生論、様式論の次なる問題を探索していくとき、一つの指針となったのは、中世文学研究サイドにおいて展開していった、いわゆる『中世日本紀』論にあった。今回バネラーとして招いた阿部泰郎氏は、まさしくその研究の最先端を切り開いた一人である。

いわゆる『中世日本紀』とは、院政期以降、中世における歌

学、有職故実、物語、謡曲などの注釈において、「日本紀（記）に云はく」といった形で引用される「日本紀」テキストの総称であるが、注目されるのは、それら「日本紀」の名で呼ばれる神話・伝承・説話の類いが、現在われわれの知っている『日本書紀』とは大きくかけ離れた、まさに中世独自の言説世界を有しているところにあった。従来それらは「荒唐無稽」として学問的な対象とはされてこなかったが、その実態を探ることで、近代的価値観とは異なる中世独特の知や学問の内実が明らかにされてきたのである。

そのとき浮上したのが、「注釈」という方法であった。近代的な学問における「訓詁注釈」とは異なり、テキストや語句の注釈行為が、あたらしいテキストや言説を生み出していく「創造的」活動としてあったということだ。『中世日本紀』といっただけ、そう呼ばれるテキストが実態としてあるわけではない。「日本紀」というテキストが、あらたな文献を生成させていく運動の核としてあったこと、その運動を担う知の営為として「注釈」という方法があったことが発見されたのである。

ひるがえってみれば、「注釈」という視点は、じつは『日本書紀』そのもののなかに内在していた。「本文」（正文）に付された多くの「一書」の位置である。八世紀に成立した時点で、

すでに『日本書紀』は固定されたテキストではなく、注釈という行為によって、つねに流動・生成していくエネルギーを孕んでいた。それが平安時代前期に朝廷主催で行なわれた「日本紀講」に結実し、博士たちの「日本紀私記」という、あらたな「日本紀」言説を生み出したのである。今回のもう一人のパネラーである津田博幸氏は、古代サイドにおける「日本紀」研究の最前線にたつ。

それにしても、今回のシンポジウムで、両氏の視線が、期せずして「聖徳太子」という人物に注がれたことは興味ぶかい。阿部氏は『聖徳太子伝暦』『三宝絵』『扶桑略記』などにおける太子伝が、「日本紀」の本文に依拠しつつ、さらにそれぞれのテキストがもつ「注釈的要素」から、中世における絵解きや口伝というあらたな太子伝を生成させていく道筋を提示した。聖徳太子の「神話」そのものが、あらたな歴史叙述を生み出していくわけだ。このとき聖徳太子は、歴史叙述のなかの主人公として語られつつ、同時に歴史叙述を創造する主体となる。聖徳太子が作ったという歴史書（『天皇記及び国記』）が、平安期に『先代旧事本紀』として実態化される。それを生成させた現場こそ、津田氏が扱う「日本紀講」であった。

津田氏は、「日本紀講」における注釈の言説に内在する「神学」を見いだす。それは『日本書紀』自体のなかに内蔵されていた「中国式神秘思想」（陰陽論、予兆説）とも絡み合っている。そうした神秘思想の集約として造形され、かつ史書の起源に位置づけられたのが「聖徳太子」という存在であった。津田氏の聖徳太子への視線は、当然、阿部氏が対象としていく中世

太子伝の世界へと繋がっていく。なおかつ、中世の歴史叙述が、古代とはまた違う、あらたな「神学」とリンクしていたことは、いうまでもないだろう。

それにしても、「神学」とは何なのか。津田氏はそれを「神について解き明かしたり、神とコミュニケーションしたり、神を現出せしめたりする知と技術の総体」と定義する。習俗としての信仰とは別の次元ともいう。「神学」というタームが喚起するのは、たとえば村落共同体のなかでの「神語り」「神謡」とは異質な神話言説といってもいいだろう。

この点をめぐって、神話は作られるものではない、歴史叙述と神話とは違うといった、白熱した論議を呼び起こした。両氏の報告はともに、「神話」なるものの生成を明らかにする。「神話」はけっして「始原」から伝承されたものではなく、つねに作り替えられていく。その変成していく神話を生み出す力こそ、「注釈」という言説の方法であった。「注釈」という知の領域を見いだすことで、神話の創造がたんなるイデオロギー的な議論をこえることを可能としたといってもよい。それによって、神話から歴史叙述へとという段階論を反転させたいという。このときの議論は、両氏の方法がもつ、発生論的な神話研究との差異を際立たせてくれたのである。

いうまでもなく「生成」の視点は、文献研究にとどまらず、第一部で扱われたフィールド研究ともクロスしていく。今回のシンポジウムは、「古代文学」という限定された領域を越境し、まさしく新世紀に突入した我々の知と学問のあらゆる場所に開かれていたのだ。